



晴天の心

立教186年10月号
大阪府富田林市寿町4-9-10
URL:www.tomiishi.net
TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



秋季大祭 10月19日(木) 午前10時～
婦人会例会 10月9日(月) 午前10時～



10月は立教月です。秋季大祭となります。教祖140年祭への諭達が発布されて1年。各々が諭達を拝読し年祭に向かっての心定めをして勇んでおられることとおもいます。10月29日(日)には、ようぼく一斉活動日が全国各地で開催されます。今回の年祭活動では、本

部での大きな普請はおこなわれません。各々が年祭に向けて心を定めて仕切って、ひながたを辿って日々の暮らしや信仰を深めることが大事なことだと思います。その信仰や年祭についての自分自身のセルフチェックをおこなう機会が、今回開催されるようぼく一斉活動日です。会場は各地の支部で設定された教会を会場として、諭達の拝読、おつとめ、ビデオメッセージ、各会場ごとの内容(おつとめ、ひのきしん、にをいがけ、講話など)で、おこなわれます。参加お供えは300円。時間は約2時間となっています。お住まいの各支部からも会場についての連絡が届けられるとは思いますが、教区・支部情報ネット <https://tenrikyo-regional.net/> から、お住まいの住所を検索すると最寄りの会場がわかります。なお、富石分教会は南河内支部3組にありますので、会場としては、錦分教会へ行くこととなります。当日は私も、錦分教会で受け入れる側として務めさせていただきます。どうぞ、あまり難しく考えずにお住まい近くの会場にご参加下さい。きっと、参加することで信仰や年祭について心に収まる事が出来ると思います。ようぼく一斉活動日 会場 全支部に会場が設けられます
※教区・支部情報nettと <https://tenrikyo-regional.net/> で掲載しています。



- 開催日
- 第1回 立教186年・2023年 10月29日(日)
 - 第2回 立教187年・2024年 6月1日(土)／6月2日(日)
 - 第3回 立教187年・2024年 11月3日(日)／11月4日(月)
 - 第4回 立教188年・2025年 5月31日(土)／6月1日(日)
 - 第5回 立教188年・2025年 11月1日(土)／11月2日(日)
- ※第2回以降は、会場によって上記のどちらかの開催日となります

参加御供 300円(子連れの場合、中学生以下は不要です)
プログラム 開会挨拶・おつとめ・諭達拝読・教会本部からのビデオメッセージ
会場ごとのプログラム・閉会挨拶

今日の
おやのことば

「神の守護ありやこそ」

神の守護ありやこそ、まあ今日も
目出度い／＼、皆鮮やかと言う。
目の前に現われたる。



おさしづ 明治34年8月17日

少し前のことですが、雨上がりの朝、レモンの木を植えた鉢を動かすと、下に敷いてあった簀の上で、白い玉のようなものが散り散りに弾けたように見えました。驚いてもう一度目を凝らすと、小さな蜘蛛の子たちが、ものすごい勢いで散らばっているのです。

何げない日常の中にも、時には自然の神秘的な姿に魅せられて深く感動することがあります。

まるで花火のように、同心円状に広がっていく蜘蛛の子の姿を見ていると、なかなか成長しないレモンの木にも、不思議な自然のはたらきと生命が宿っていることを感じます。こんなに深遠な自然のはたらきを、小さな人間の思惑で動かすことはできません。

「神の守護ありやこそ、まあ今日も目出度い／＼、皆鮮やかと言う」

原文は、身上の伺いに対する「おさしづ」ですが、いまここで与えられている親神様のご守護に感謝する心の大切さを教えてくださったものです。自分にできることは、精いっぱい工夫をしたうえで、親神様にもたれる心が大切

なので。

私たちの力だけでは、草木一本創ることはできません。しかし、親神様のご守護に感謝しながら、身近な自然環境を守り、家族を思いやり、地域社会に働きかけていくことは可能です。

自然の神秘に思いを馳せながら、ゆっくりレモンの木の成長を見守りたいと思います。

(岡)

おさしづ 明治三十四年八月十七日 深谷徳次郎小人景三五才身上願

さあ／＼尋ねる事情／＼、さあ小人に又候々々々だん／＼これまでの処と言う。皆それ／＼事情、何かどうでもという心無くば、何かの事思うよう成ろまい。それからそれ／＼中寄り合うた中／＼、こうと言うたら、思わく通りと言う。又どうとあり、又分かり／＼だん／＼事情尋ねにゃならん。事情によってさしづ及んだる。さしづ通り守れば、事情は勇んで事情と言う。もう思わく／＼通り通りたる。又変わりて小人になあと言う。よう聞き分けにゃ分からん。何よの事も掛かる／＼。めん／＼に掛ければ十分の理と／＼、めん／＼に掛ければ十分という心無くばならん。十分々々皆惣々分かり／＼、あちらも分かりこちらも分かり立って来る。これまでもあって分からん。さあ身上からさしづ。さしづ通りすれば暫くと言う。一日の日も楽しんで居る。又という、親の心定め。集まる／＼、善き事もどんな事も集まる。この道心々無く、道やない。内々こんな事と更に思うやない。親という心定めてみよ。元というはどんな事も治め。小さい事ではならん、小さい事ではならん。成る事成らん事ある。何処其処あってはなるまい／＼。又半ばで粗相あってはなるまい。神の守護ありやこそ、まあ今日も目出度い／＼、皆鮮やかと言う。目の前に現われたる。これ証拠、内々どんな事あろうが、こんな事あろうが、心に掛けて居てはならん。親という心定め。一時ではない。身上迫り／＼、もう余程迫り、なれど、精神定めて掛かりた時の事思てみよ。これ聞き分けにゃならん。



註) 身上の意味

天理教で使う「身上」という言葉には、主に二つの意味があります。まず一つ目は、人間の身体のことを身上と言います。

この身上、すなわち身体が健康があってこそ、人はいろいろなことをすることができるのです。しかし、神様の思召しに添わない使い方をしてしている時は、この間違いを知らせるために、親神様は身上に病などを与えて、てびきをして下さるのです。

この病などのことも「身上」という言葉で表現されます。

なので、よく聞かれる日常会話としては、

「この身上を良い機会に心を切り替えていきます。」

「この身上は、神様からのお手引きだね。」



事情の意味

また、親神様はてびきの方法として、病気の身上だけでなく、家庭の揉め事や災害、その他のいろいろな苦しみ、悩みなどを事情としえお与え下さいます。

おさしづに

”事情なければ心が定まらん”

”身上・事情は道の花”

と仰せられるように、身上・事情がなければ、自分自身の間違った心遣いを悟ることができません。

また、身上・事情のてびきを頂いて、初めてさんげすることができ、その節から喜びと幸福の花を咲かせることができるのであります。

教祖逸話編

61.廊下の下を

明治11年、上田民蔵18才の時、母いそと共に、お屋敷へ帰らせて頂いた時のこと。教祖が、「民蔵さん、わたしとおまはんと、どちらが力強いのか、力比べしよう。」と、仰せになり、教祖は、来たの上段にお上がりになり、民蔵は、その下から、一、二、三のかけ声で、お手を握って、引っ張り合いをした。力一杯引っ張ったが、教祖はビクともなさない。民蔵は、そのお力の強いのに、全く驚嘆した。又、ある時、民蔵がお側へ伺うと、教祖が、「民蔵さん、あんた、居間は太西から帰って来るが、先になったら、おなかはんも一しょに、この屋敷へ来ることになるのやで。」と、お言葉を下された。民蔵は、「わしは百姓をしているし、子供もあるし、そんな事出来そうにもない。」と思うたが、その後子供の身上から、家族揃うてお屋敷へお引き寄せ頂いた。又、ある時、母いそと共にお屋敷へ帰らせて頂いた時、教祖は、「民蔵はん、この屋敷は、先になったらなあ、廊下の下を人が往き来するようになるのやで。」と、仰せられた。後年、お言葉が次々と実現して来るのに、民蔵は、心から感じ入った、と言う。

131.神の方には

教祖は、お屋敷に勤めている高井直吉や宮森与三郎などの若い者に「力試しをしよう」と仰せられ、ご自分の腕を「力の限り押さえてみよ」と仰せられた。けれどもどうしても押しさえ切ることが出来ないばかりか教祖が少し力を入れてこちらの腕をお握りになると、腕がしびれて力が抜けてしまう。すると「神の方には倍の力や」と仰せになった。また「こんな事出来るかえ」と仰せになって人差し指と小指とで、こちらの手の甲の皮を、おつまみ上げになると、非常に痛くてその跡は色が青く変わるくらい力が入っていた。また背中の中真中で、胸で手を合わすように正しく合掌なされたこともあった。これは宮森の思いで話である。

陽気チャンネル これが天理や・力比べのお逸話を深読みすると・・・



先日、所属する写真クラブの写真展が初めて開催されました。富田林市民会館 2 階の展示室を会場として会員 5 名招待 3 名でそれぞれが撮影した自信作を A3 サイズなどに大きくして額装して展示順も各自で考えて行いました。

このクラブはもともと、とんだクラブとして、富田林駅前にあった写真店富士カメラの常連客同士が集まって顔見知りとなり店主の呼びかけで結成され、毎月撮影会と例会での互選、その作品を当時銀座にあった CONTAX 銀座の館長に依頼して添削をしていただき、翌月テープに録音された講評を全員で聞きながら腕を磨いていました。

クラブはコンタッククラブとなり数年活動しましたが、デジタル化の波に押されてフィルム写真からデジタルでの写真に変わっていくことや、店主の健康問題などから、店を閉められるになり、その上京セラがカメラを止めたことから、クラブも解散をすることになって、継続して写真を楽しんでいく方が集まったのが、現クラブです。

今回の展示会は母体のコンタッククラブ時代に河内長野ラブリホールでの開催以来ですので、準備段取りがあまりうまくいかなかったこともあり、来場者はごくわずかでした。

2 日間の日程の 2 日目は、会場に居たのですが、出展者の知り合いの方が、それぞれの写真の前で和気藹々と写真談義をされている姿は、写真展のいいところだと思いました。

その写真談義は駅前の写真店でプリントを仕上げるのを待ちながらコーヒーを飲んでいるときに、それぞれの写真を見ながら撮影会での話やそれぞれの写真の撮影裏話に花が咲いた懐かしい情景に似ていました。

2 日目午後には、生みの親ともいえる店主の来場もあり 88 歳を超えて耳が少し衰えておられましたが、来場された方が、店主と懐かしい話で盛り上がり今の暮らしや写真の話、展示されている写真を見て思いを語られる姿を見ると、開催してよかったと感無量でした。年とともに誰もが出来たことができなくなっていく、でも、一所懸命楽しみながら暮らし過ごしてきたことは、いつまでも忘れることなくその人の心の支えになる。

小さな駅前のカメラ店から始まった小さなクラブですけど、いいクラブだなと思いました。

次回は 12 月 9 日市民会館で行われる市民文化祭に出展します。

